

講 師 埴生 雅章

演 題 「建築の力・職人の力」



略歴

昭和 23(1948)年 小矢部市生れ

昭和 48(1973)年 富山県に採用される

県民公園、都市公園、都市計画などを担当、土木部長を最後に退職

平成 20 年(2008)より、県の公園を管理する[財]富山県民福祉公園の副理事長

建築の中でも設計の方々とお話すると思っていたが、建築界の各分野のそうそうたる方々がお揃いで、大変なことになったと思っている。

今まで県職員と官司と二足の草鞋を履いてきた。

今日はその双方の立場での経験を一つずつお話したい。

**環水公園での経験**

・・・「公園の価値創造」における「建築の力（＝景観形成力）」を痛感

今年 3 月、20 年余りの歳月をかけて、環水公園が完成した。



この写真は見晴らしの丘の上に建つふわふわドームで、周りに中国庭園の回廊にヒントを得た仙田満氏の「廊的建築」がある。

天門橋の上から眺めた環水公園の景観の特色について考えてみる。まず、元々運河でシンプル極まりない水際線を形成しているということがあげられる。

泉と滝の所までが公園で、その向こうは都市 MIRAI 事業

で建設された。その境界はこれも廊的建築となっている。



この公園は水と芝と少々の樹木だけでほとんど何もない。何もない空間だが、ここに立つとなかなか良い空間だと皆様がおっしゃる。

その要因のほとんどが建築の影響にあり、環水公園の回りに建つ建築が公園の価値を高めていると思っている。

デザインコントロールされているエリアは、調整役として神奈川大学の高橋志保彦先生を富山市が起用し、周囲のことを考えて、素材・色が選ばれた。建物の設計に当たっては一流の設計者の間で相当慎重に検討されたと聞いている。

公園はほぼ完成したが、石井知事から、いくらぐらいかけたのかと聞かれ、120 億円と答えたところ、それにしては人が来ていない。閑古鳥が鳴いている。なんとかしなさいと言われ、あの手、この手で PR し、スイート・クリスマス、ナイトクルージングなどのイベントを実施した。



運河は埋めて道路にする予定だったが、昭和 59 年に船だまりを公園にし、周辺も整備することに方針転換した。

利活用策によって知名度がアップし、公園の価値が向上した。

制度が変わって、都市公園の中で商売が出来るようになったことから民間のお店が進出し、人が集まってさらに楽しむようになって、ようやく完工式を迎えた。



スターバックスコーヒーは同企業の世界の店舗の中で環境との調和部門 N01 に選ばれたようだ。



H23 年 8 月に、アーティスト加賀谷武さんが、ロープを一本張るというインスタレーションをおこなった。

普通の人が見ると、ロープを一本張って何がおもしろいのかということになるが、しかし、「ロープが作品なので

はない。ロープ一本で空間全体が変わる。新しい空間の誕生である。空間が作品だ。」という。なるほどと思った。

芸術家は、ロープ一本でこの空間を変えられることができる。ということは、建物一つを建てることは空間に対しまことに大きな影響があることなのだと思う。

その後、フランス料理店「ラ・シャンス」も出店した。



しかし、まだ問題は残っている。

船着き場、仮設テント、駐車場の車が丸見え。

レストランと公園との関係がどう評価されるかなど。

野外劇場付近だが、これも側面に問題がある。



日本の野外劇場は真夏の日射がきついので、ギリシャやローマとちがう。日よけがほしいとの話も出ている。

さらに、電柱が見えるなど、まだまだ課題はある。



公園外の建築はもともとあったものなので、植樹で目隠しをしようとしている。

いろいろ課題はあるが、環水公園はようやく皆さんに楽しんで貰える公園になったのかなと思う。元々は富岩運河



自体をまちづくりに活用していきたいということだった。遠い夢かもしれないが 国際的な「水辺観光都市」にしたものである。

ここへお客さんを案内すると、「これは日本の風景ですかね?」と言われるくらいなので、その可能性はあると思っている。



今後、関係者の方々の協力によってその方向に進めることができれば良いと思っている。

### 埴生護国八幡屋根修理工事での経験

・・・「建築美の価値創造」に果たす「職人の力（＝伝統の技の威力）」を体感



埴生の護国八幡宮社殿は国指定の重文となっているが、江戸時代の初期に加賀藩が順次造営したもの。

奥の方からオーソドックスな流れ造りの本殿。本殿手前の大きな拝殿と神主がお参りする幣殿との間が釣殿。

この社殿の特色は、あまり他に見られない釣殿があること。日本の神社建築は小さなものからスタートしたが、時代とともに進化し、大きくなった。

建築史の専門家に言わせると、拝・幣殿は仏教の禅宗様式とのこと。建築的には三棟とし、全て重要文化財となっている。

もう少し時代が下ると、日光東照宮のような権現造りとなり、全部の建物が一体化する。護国八幡宮はその少し手

前の段階を示しているというので建築史的にもおもしろいと言われている。



滋賀県の比叡山の麓にある日枝大社は富山の山王さんの総本社にあたり、重要文化財をたくさん所蔵している。神社建築としては非常におもしろいものが揃っている。

東本宮は埴生八幡と同じように南面して建っている。天子が北に居て人々は南に居るとするのが一般的である。一方、樹下宮（このもとぐう）は比叡山につながる神体山を背に、琵琶湖の方を向いて東向きに建っている。東向きのこの本殿の建築時期が古い。後で、南面している東本宮が建った。両方が共存している。また拝殿と本殿が分かれていて、その間が空間になっている。



25年に一度の拝殿屋根の葺替えを行った工事中の写真。埴生八幡宮の屋根は「さわら」の板材による「こけら葺き」で、古いものを撤去しているところ。

25年たつと、外の板は薄くなり割れやすくなっている。



職藝の上野教授と岡山の小島工務店の屋根職人の棟梁。



古い葺き材を取った状態。野地が見える。

屋根自体は簡単なもので、この上に板を敷いてうまくいくかと思うくらい。軽くできている。

側面のケラバの曲面のところ。



設計書ではサワラの赤身で手割り板。葺き足3センチ、板厚が3.6ミリ、長さが36センチ、幅が9センチ以上となっている。

(ここで、サワラ板を回覧)

文化庁はお金が無いので、全体葺き替えの予算がつかず、3/4だけ終わった。これで、この手割り板の枚数は12万枚だった。



張っている途中。徐々に仕上がっている。



難しい棟の部分の葺き工事

張り終わって、葺きたての時に日が当たると黄金のように輝いていた。



正面の千鳥破風は構造的には必要が無いが意匠的に付け足したもの。石段の下から見上げると堂々としてそびえて見える。そのような効果を考えて昔の棟梁は造った。

拝殿・幣殿はひょっとすると加賀藩の棟梁の山上善衛門の作でないとも言われているが、決定的な資料がない。

日本の社寺の建物は屋根を大事にしてきた。いかに美しさを強調するかが命だった。しかし、25年に一回相当のお金をかけて葺き替えして維持していくことは大変なことではある。



話は変わるが、出雲大社は現在、平成の大改修中  
文化財関係団体の研修で行き、本殿の屋根改修中を間近  
で拝見してきた。

現在の屋根は少し反りがあり、屋根材は「ひわだ（檜の  
皮）」葺き。



元々は伊勢神宮のような直線の屋根で、おそらくは茅葺  
きと推測されている。

日本最大の神社建築というだけでなく、平安時代には日  
本で一番高い建物だった。高さ 48m で東大寺の大仏殿より  
も高かった。

大林組の技術者が出雲大社の神殿を現代ではどう造る  
かを検討した本がある。その中で、古代の人がいったいど  
うにしてつくったのかを推定している。

現在の建物はずーっと低くて 20m くらいしかない。

でも、伊勢神宮の倍くらいの高さはある。

一時、ひわだ職人が居なくなったということで大騒ぎに  
なったこともあり、材料と職人の確保が文化財関係者の間  
で大きな課題になった。今はようやく、ある程度確保でき  
るようになっている。

ついでのことだが、H12 年に境内の発掘で昔の柱の下部  
が発見された。宮司家に伝わる平面図に 3 本の柱を鉄輪で  
巻いたものが書かれていたがそれと同じものが出てきた。



平安時代に 48m もの高さのものが造られ、何回も倒れたと  
いう記録があっても信じられなかったが、物的証拠により  
証明された。

近くの島根県博物館に出てきた柱が展示されていて重  
文になっている。入り口の発掘場所に実際の柱の大きさの  
模様がある。大変な建築技術だったと思う。

ここで環水公園の風景の話に関係したことを付け加え  
る。私は、古い温泉地は日本の古い風景文化の発祥の地と  
考えている。



これは上州伊香保温泉の全景図

自然と一体になった温泉場。その中にたくさんの建物が  
あり、湯治場になっている。



アップで見ると、一番高いところに神社が祭られている。  
その下に木造 3 階建ての家並みが連なり見事な風景を形  
作っている。

現在行くと、坂の町の温泉ということは変わっていない  
が建物はつまらなくなっている。



たくさんのお客さんを泊めるにはこうするしかなかったのかもしれないが・・・。

日本の温泉はどこに行っても同じ。

しかし、古いものを大切にしている所もある。

よく知られているのが城崎温泉。



ここは木造三階建ての建物を大切にし、街並を保全している。

まちの中を浴衣がけの人が歩いて楽しめる。



次は、近くの山代温泉の白銀屋さんで登録文化財になっている。写真の後ろのつまらないビルはそぐわない。



一方、明治時代の総湯の復元工事も進められている。

これが一つできるとあたりの風景が一変するということになると思う。



長浜の黒塚の町では、昔はじいさんとばあさんと猫ぐらいしか通らなかった所が、今は年間 20 万人以上の人に来て大変な賑わいを見せている。

うまく古い建物を生かしてまちづくりを成功させた例だ。新築でもこのようなものが造られている。



最後に、今回の話で言いたかったことは建築というものは風景をものすごく変えるということ。

**建築の持つ風景力は絶大なものがある。**この国ならではの風景文化の再生・創造を是非進めて行けばいいと思う。一気に難しくても、一つ一つどこかに拠点になる良いところを造るとそれが波及していくと思うので、皆様方のご奮闘も期待し、私の話を終わります。